

日本書紀傳 八卷上

和書
一〇五二二號

十四

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (23)	
函號	特	85 1

内閣文庫



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教
文
庫
印

南
政
直
庫

日本書紀傳八之卷

神代上第六

四神出生章

穗積重胤

謹撰

次生海次生川次生山次生木

祖句句迺馳次生草祖草野姬

亦名野槌既而伊弉諾尊伊弉

册尊共議曰吾已生大八洲國

○日本書紀傳八

〇一

内一三六八三號

公東手平代記之甲
非第傳大八傳造
結上次入海川を造
結ふ云々云々造
結ふ云々云々造
結ふ云々云々造
結ふ云々云々造
結ふ云々云々造
結ふ云々云々造
結ふ云々云々造
結ふ云々云々造

初判れしより日月ハ有つれども其を所知者す日神
月神ハ二神の御子ハ坐て其神と坐と同一事あり
然れバ此ハ二神の御言ハ依て其物を生給ふと爲る
や勝りたるもむ其公海神川神ハ彼後除の時ハ成坐
一山神ハ火産靈神の御骸より成坐一木神草神ハ己
く此時ハ坐成一ハ依て御名を詳ハ擧ぐられたるも有
けり如此く予ハ心定まり一故ハ生海生川ハ唯ハ海
と川とを生坐ると一ハ神字ハ訓附すむ但纂疏ハ海者萬流
之所鍾川者地之汚山者地之隆先海次川次山蓋造化
之有序也と有如くありむハ海川山も自然の物の
如くふれども己ハ國をすハ生給へり一者を況て
海を生之川を生之山を生給ひたりとて何の疑ハ
ハ有む ○生海ワタラとハ大海オホウミを生坐るハ海神を生坐る

あらず柳前章ハ以天之瓊矛指下而探之是獲滄海其
第一一書ハ投戈求地因畫滄海と有て滄海ハ一ハ此
國土の未出來ざり一其先より有ハ物ふれば此ハ生
海ウミと有てハ事の重複れり如く聞えし如何なる状
ありを猶熟思ふハ滄海とハ海の大名あり此を和多
と云時ハ海の用を云ふハ少ハ小名ある事此大地を都
知とも久尔と云ハ神字を迦微とも美多麻とも云ガ
如ハ皆體用の差別を立たる名目あり其ハ此大地の
云時ハ大名少ハ天地と別れり一初より都知と云て
既ハ其物有を彼ハ洲起元章ふどハ其大地の中ハ
て又更ハ國を生給へる事の有を思ふ不可ト斯く又
都知とも久尔とも通ハ一用ありと此と全く同一

然此ハ滄海ハ大地小對云言小て全體の名あり故小
 滄海と云ても大地と云ても此大地を云称ふる事已
 小傳六丁二十小註せるが如く偕海を和多と云時ハ地
 を久ふと云小對へ云言小て國より國へ渡往來小用
 小因れる称あり故情考る小其始二神の滄海小國土
 を生列ね給ふと雖も大三輪三社鎮座次第小初伊弉
 諾伊弉冉二神共生大八洲國及處々小嶋而地推如水
 母浮漂之云と有る状少く有る故小其海と成べき
 物を生給へり故小國土と大海と際柁く別れ初
 なる者ありけり祈年祭詞小音海原者掉救不干舟艦能全留極大海尔舟滿都と氣成と有

と有を以て青海原と大海とを混りさざりし事を知
 べし此小青海原と云ハ其極を云ひ大海とハ舟の
 擗浮ぶ所を云て事ハ狭きあり 偕元より滄海と云物の有る上小大
 海を生と云事ハ此大地有る上小國土を生坐ると同
 小事小て二神の如何ある奇異小神神物を生給ひ
 て其始を爲給へりけむ其ハ凡人の争でう測知奉る
 事ありむや生賢一と人智を加へて左小右小云べし
 事小ハ非るあり記傳五三十三小賀茂翁説を擧て海を
 和多と云ハ渡ると云事あり古書小山小ハ越と云ひ
 海小ハ渡ると云り齋明天皇御紀大御歌小耶麻古曳
 底于游倭拖留騰母と有り又万葉一廿六丁小對馬乃渡

渡中ふふど有を思ふ可しと有が如し然れば海ハ渡
ると云が主意あるを以思ふ此小生海と有其因て潮の
満干るふどの事の其時小起初たり者あり但潮ハ
没小随て潮シする者小一有れば二神小預る事
の状ふれど其月の出没小潮を従ハ令る事ハ二神
の生海給へり其潮シする小因て船の往來の有て
各小國の利用と成る事ハ云も更あり其小因て魚鹽
ふども出来て人民の幸と成る事小一有れば傳の表
小ころハ唯生海と云事小ハ有ければ裏小ハ舟楫の渡
れ々と魚鹽の出来ぬとの幸の出来始れる事を合
たる事云も更あり其等の委し事ハ傳十卷小説る
第六一書海神の下小云むを此ハ

唯其海を生給ふと云事
を少り徴し云ふ耳あり○生川ハ此ハ川神ハ非ず
唯川を生坐るあり偕川ハ山の凹き處小就て水の其
小從ひて流る處小一有れば殊更小生と云へり理
無き事小ハ有れども其理と云ハ國土の體の全く備
ハれり今を以て古を推す事小ハ其理も亦眞の理
小ハ非るあり二神山の凹き處を定めり水の流る
處とハ被成たる小此を以て田園を糞ふひ又水の
國土の利用を成べき爲小生成し給へるあり大あり
國土を
さへ小生成し坐る大神小坐るを川を生給ふとて其
何の異し事ハ有む偕海を川を川を萬を兼て水
神と申すハ罔象女神小坐る川神と云ハ又別あり其
神小ハ非る事傳九卷第二一書小就て云べとあり

○生山も山神みづ山の體を生坐るなり此傳小依
て思ふ小二神の生坐る國ハ唯平坦小ころ有つて
故殊更小山を生て其上小高く峻く聳え立りて
國の鎮とハ成給へる者あり其ハ私記小古説云天神
所賜瓊矛既探得礮馭盧嶋畢即以其矛衝立此嶋爲國
柱也即其矛化爲小山也と有を見べし彼嶋も平坦小
成れるを後小其矛の小山と化て其上小居を以て國
土の其始も然るなり事をも明しむ可あり自餘の嶋に
嶋ふどハ二神の滄海を畫探りて引上給へる其矛
鋒より垂落れるが凝累積りて成れりハ始り山の
形を具へて隆く有けむと思ゆるを此ハ小山とハ
後小其矛を立給へる小成れるを以て他の嶋の

山と云稱の事ハ
古傳ハ生山神等
有る下小なり

出來始めり然山を生給ひて大地の上小置給へり
狀を知べし事ハ上小引る鎮座次第小二神共生大八洲國及處々
小嶋而地雅如水母浮漂之と有る如くハ在りバ山
を生て國の鎮とハ成給へり者あり可し万葉三
廿七詠不盡山歌小日本之山跡國乃鎮十方座神可聞
寶十方成有山可聞と有ハ其頃の人の思寄へる事小
在りハ決て古傳小依る事知べし傳六爲國中柱傳
云る説共をも亦此小然るを或書小天ハ唯積氣小
引合せて考合す可し七化暨天柱の下小
て地ハ唯潮水耳なり火氣燥燥小由て潮水漸小涸初て
突出せる者ハ山岳と成り後て頭なる者ハ原野と成

リ漸地の體定る其ハ深山幽谷の中ハ貝類の化石と
成て遺れ々を以知べしと俗意の甚しき者少く良も
爲れば西洋物理学の輩の洪水ノと云説の類ハ
神典の古傳ハ昔ける妄談なり物理ハ識と云物ハ天
地開時初有水荒云ハ
と云事を記して有れども其ハ大西言洪水時猛雨四
旬地面全没云ハ考其時當帝嘗之八年壬辰云中國洪
水在堯時是一徵也と云る事ハ有れども彼潮沫の
凝成れハ彼末この國ハ天地開時とも云の
我皇大神國ハ一ハ神代ハ神代ハ神代ハ甚
末の神代ハ一有れば其を以て難強り儲其天下ハ
在ゆハ諸山ハ一ハ此ハ二神の生成坐るハ依て出來
れハを後ハ大己貴命少彥名命ニ柱の作成ハ給ふと
して此山を彼處ハ彼山を此處ハ其處を換て國と

山との位置を能定め給へるハ海底ハ在る處の山
をも陸上の山ハ累ね給ふ可ければ貝類ハ更なり海
中ハ所産れる物の石ハも何ハも化れる其任ハ一
山ハも谷ハも必無てハ得有る者ありを然れ
ハ遇石ハ化れる貝の以り有て其徵ハ成べり
さるあり大和風土記ハ大穴持命少彥名命行到山跡
山跡國者往昔山岳多而平地ハ所治天下大神
國其國也山岳多而平地ハ故乃數山開谷爲平夷因號
之山跡國と有を以其ニ柱の形作爲給へる事を知べ
く又万葉七廿三ハ大穴道少神作妹勢能山見吉と
有をも又思ふ可き者あり又七廿三ハ大汝少彥名能

大鏡云詞ふる此神
名の下は是木座と
有かか一か一宇神を
草祖と云有かか一か
一唯

神社者名著始難目名耳乎名兒山跡負而之有も二神
の生給ひ一古小ハ名も無り山あるを大汝少御神
の相作る一と代より某山と云名の成れを知べし
又同卷小ハ千梓之神之御世自百船之泊停跡ハ鳴國
風土記小湯郡大穴持命見海耻而宿奈昆古那命欲活
而大分速見湯自下桶持渡來而漬浴者云こ有ハ伊
豫の温泉郡の湯ハ豊後國大分郡あり速見湯を下桶
より引給へる傳あり右の如く海底小下桶を伏て湯
を通し給ふ計の神小御在る者を況て海中の土砂を
貝介ぶぐろ小引て山を造りけむ事又何の疑
ハむ此等の古傳有を以ても洪水の後小山の
蹟ハれたりと云る外國の妄説ハ捨べとあり○木祖
公木神と申す事あり第六二書小本神等と見え古事
記小も生木神名久久能智神と有り舊事紀小生木神
等号曰句句迺馳

皇祖命ふと申すん云
種子と云て相續く物
非るを如何と云高む

神と有ハ此第六二書 借上の海川山等ハ其物を生給
ひて未其神坐ごるを此小ハ其神を生給ひて未其物
ハ非りげろ小此神等の生坐ごより本草共小追次小
其山小も野小も生茂り初たごを以て殊小本祖とハ
草祖とも傳たごして他小例無き事あり士清ガ通證
小按草木有
榮拓而以種子相續者故曰祖祖與親同訓老之義也と
有ハ然る事ふぐろ此ハ海川山の物あり小本草ハ其
神ありを分たれむ爲ふ ○句句迺馳第六二書小出古
事記小ハ久久能智神と作り句句ハ木本る可一記
朝倉小比氣多能和加久流須婆良和加久開尔と詠る
ハ引田之若栗柘原若木邊尔ふを以思ふハ羽山戸

但記傳中一和久由
 本方葉十た三若可倍
 有と同言と向の中
 二五五五五五五五五
 本方約れるる可一
 五五五五五五五五五
 五五五五五五五五五

神の子小久の年神久の紀若室葛根神あり有ハ木木
 年神木木城若室葛根神と申す義おれハ句句迴馳ハ
 木木之留あり若て木と一言を重ハ山川ふかど
 云ハ如く其物の多ハ時ハ自小言の重
 語勢あり又右の句句の音を轉ハして久紀とも
 云て幹字の意とも成れり右義小義申す久紀とも有を以知
 和名抄木具部ハ莖和名久木と有り莖ハ字書ハ草木
 之幹也と云り其を久と云ハ万葉十四丁ハ小伎
 波都久乃乎加能久若美良と有ハ莖並あり同卷十二
 小可美都氣野无野乃久多知と有ハ和名抄ハ莖久
 久多知曼青之苗也と有是あり俗小物の速ハ長

貌を久々登と云も此意あり以上と有ハ如ハ皇太神
 帳小久具社一處称大水神御子久ハ都比女命又久
 々都比古命形石坐と云ハ別神ありめども久々ハ
 上の例あり但大水神と申すハ大山祇神の亦名カ
 るを以考ハ小此も木神と通ゆれハ其御子と云事大
 小由有リ傳第六馳ハ留あり事己小傳五丁ハ小註
 一書小就て云べし見ハ名義抄ハ莖を久は莖並久と有知
 如く偕草祖ハ草野姫と申して女神ありハ木神
 の如此く男神ハ渡らせ給ふ事寔ハ妙なる處あり其
 ハ木ハ莖ハ速くと立伸ハ状自然ハ男陽の氣勢ハ
 ろを草の嫩ハとして同く立伸ハ伸ハぐりハ其末
 の垂びたる状も亦自然ハ女陰の形容を成せハ其
 祖神の若此く男女ハ坐りハ因る事あり偕此ハ大殿

天慶六年壬寅
小度志重
元加
野丹毛
佐之毛
田良年

祭詞講義小も註せる如く平田翁説小此二神共小保
食神の分御靈小坐て其神小属給ひて御靈威を幸給
八在津日神大在津日神
ふ事の神直日大直日神とハ天照太神より以前小成
坐て其荒魂神和魂神と成坐て属奉給ふと同也然れ
木祖草祖の二神も二神の御子と見て妨無る可き者
あり平田翁の保食神の幸御魂と爲て其生坐る傳を
省れたるハ
固陋あり ○草祖ハ古事記小野神と有り舊事紀小
生草祖号曰草姫亦名野槌と有ハ此の文を取れ者あり
備此小生木祖句ハ逆馳と有る第六一書小生木神等
號句ハ逆馳と有れ也ハ草神の事ハ其小見えざるハ
傳へ漏され記傳四十小草ハ莖多り多き布依
者あり可し ○記傳四十小草ハ莖多り多き布依
と云る事此彼見えたりと有ハ右の莖並又薑ふ也の

例小依れバ實小然る事ふれども又思ふ小莖少あり
有べし其ハ木の莖の太く強く小對へて草の莖の細
く弱きを以知べし ○草野姫ハ釋紀述義小私記日問
草野姫讀有説云如何答師説加夜能比賣止讀之
古事記云鹿屋野姫安氏説草讀如字假名本久依能比
賣止讀之と有り草讀如字ハ假名本小久依能と訓
るを云ふり然れバ加夜怒と云時ハ其草の生立る野
就ル神名ふと久依怒と云時ハ何と無く其草の
生る野神と云事あり備右の加夜能又久依能ふと云
能ハ怒と訓べき所あり 記傳五小野神の野を古ハ怒
と云一ありと云れたり如く

古事記白檮宮殿高佐士野を多加佐志怒應神天皇
御紀野蒜を怒珥比蘆菟弥珥と有る古書皆然り
記傳五四十加夜ハ記ハ以鶉羽爲葺草と有テ訓葺草
云加夜と註せり本義少ク何れも有ル屋葺キ料ノ
草を云名あり万葉一十一小吾妹子波借廬作良須草
無者小松下乃草平荊核四五十八小板蓋之黒木乃屋根
者山近之明日取而持將參來又黒木取草毛刈下仕目
利勤知氣登將譽十方不在一云在八五十八下小波太須
寸尾花逆葺黒木用造有室者迄萬代と有る此等を合
せて思ふ可一茅と云一種有ル屋葺小主と用テ故の
名あり楮野神の御名小負給へる故ハ野の主と有る

△但此加夜ハ茅を
云多し傳廿九三百二
ト云べし

△儀武造大嘗宮階小
爲文同科料葺云向
下食野者野神云
葺草之有る以葺
野神ノ名義説
是少し爾宗天皇
元取葺草葺者云
と葺草を以テ訓
名和名板郷各小
因幡國淡美郡大
草於保加也とも
見えたり

物ハ草少ク草の用ハ屋葺る主ありける故草字を即
加夜とも訓り上代ハ大御殿を始テ允テ草以テ葺つ
ればありと有ハ實小謂れたる説ハ必む有けり一万葉
と真草荊荒野者雖有とも有テ寔小野の主と有る物
ハ草あり又大嘗祭式小木嘗宮の事を構以黒木葺以青
草と有る右の四卷八卷の歌ハ合リ景行天皇十二年
御紀ハ朕聞之襲國有厚鹿文述鹿文者云と宣へる
鹿文ハ昔草の事少ク厚と云ハ述と云ハ楮葺草を
右住々宅の大小を以テ云る名あり者ありハ楮葺草を
加夜と云ハ冠屋少ク屋上小蓋カサとせて雨を凌ぎ日を
凌ぐ由の名あり其ハ大殿祭詞小以天津御量氏事問
之般振木根立知草能可岐葉乎言止氏天降利賜地
食國天下登天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎

云々齋鉏^平以齋柱立^氏皇御孫之命乃天之御翳日之
御翳^止造奉仕^禮留瑞之御殿云々取言^計草^魯乃噪無久云
と有る天之御翳日之御翳と有る屋を覆ひて雨を
凌ぎ日を凌ぎ義ある事己小祝詞講義小註せり如
其外小祝詞小天之御蔭日之御蔭止隱坐^氏有
ハ何れも屋を覆ひて其内小住坐を云ふり出雲神
壽詞小天乃美賀秘冠利天の秘ハ氣の誤りて天の御
翳と冠と云事小此ハ屋の事小ハ非れども冠と翳
との例小亦名野槌ハ舊事紀小ハ小字小作り此御
引らあり紀の古本小然有けむも知べり古事記小ハ生野
神名鹿屋野比賣神亦名謂野推神と有り記傳五^{四十}
小野推神ハ野津持神なりと師ハ云れと書紀寶鏡開^{六丁}

始章第二一書小又使山雷者云々野槌者採五百箇野
篤八十玉籤又神武天皇御紀小高皇產靈身と顯齋
て祭給ふ所小火名爲巖香具雷水名爲巖岡象女粮名
爲巖稻魂新名爲巖山雷草名爲巖野推と有る皆二柱
大神の生坐る神名ふれハ山雷^{ヤマノカミ}山津見小當れり是
を以見れば實小都美と都知と同意して知ハ持ふる
可^{以上}採要と有る名義聞えたり但又一説小豆知の
知ハ久能智かどの智と同一く尊むるも有る
謂ふる事上^小○本祖と草祖と如此く並生坐て天下の
本草の祖神と成給ひける故小口訣小於山始生坂

樹有平變之性而為萬木祖於野始生茅草有潔白之性
而為千草祖故祭神專用之也と有る坂樹の事ハ天石
窟の時小在て此小所見無一と雖も茅草ハ神名小ハ
草野姫と申せば其所謂又無小ハ非らあり但此茅草
葦の事を云るハ前章第二一書小先生蛭兒便載葦船
而流之と有れども其ハ傳の誤りて葦尚不立と云る
より然る物の在りて如く誤來れども其葦だハ
未生立すと云ふて其時已小其物の有るハ非れハ寔
小茅草ヲ草祖小ハ有つて坂樹の事ハ第六
一書あり日向小戸播之摠原の下小云べし然れハ
木を伐小ハ必木神草を刈小ハ必草神を以任さる可
を寶鏡開始章第二一書小使山雷者採五百箇直坂樹
八十玉戴野槌者採五百箇野蒿八十玉戴之見元神武

天皇御紀ハ新名為巖山雷草名為巖野雷と有る山野
の神等小任一給ひ然耳あり古事記小大山津見神
野推神二神因山野持別而生神名云々と有る木祖と
草祖と並坐す事ハ無一て何時も山神と野神と相並
ハして事成一坐り此小依て木神の御名ハ何時も顯
れ坐ざるあり唯大殿祭詞小屋船
久々遲命と出たる耳有り又古事記小羽山戸神娶大
氣都比賣神生子云々次久々年神次久々紀若室葛根
神と有る羽山戸神大氣都比賣神ハ大山津見神豊宇
氣毘賣神の分御靈等の御合坐るありと所思し
由己小御年神詞 祈年山口神詞小山口坐皇神等能前
講義小云りて 祈年山口神詞小山口坐皇神等能前
白久云々遠山近山ハ生立留大木小木ハ木未打切
氏持參來氏皇御孫命能瑞能御舍仕奉氏云々と有る

木神をハ被祭すして木を生ず山神を祭れ大殿祭
詞山皇御孫命乃御殿并今奥山乃大峽小峽亦立留
木^平齋部能齋弁^平以伐操^氏木末^平波山神亦祭^氏中間
并持出来^氏と有て木神を云す其末小至て御殿造の
事を云畢乃所小屋船久久遲命屋船豐宇氣姫命登
御名^平婆奉稱利^氏と有る耳乃木神草神ハ相並ハせりけ
古史徴小掘堅多留柱折梁戸傭乃錯動鳴車無久と
云るハ木神の幸給ふ功徳小係り引結幣魯葛目能
緩比取言計魯草乃噪無久と云るハ野神の幸給ふ功
徳小係れり然るを草野姫と云ずて豐宇氣姫命と云
るハ如何と云小此神實ハ稻穀を生給へる神小坐を
餘草を以生給へるハ其幸魂の御業あり故小此ハ
其本御霊の御名以云るあり又稻菴も共小草なれば
取惣ても云べしと有る如し但草祖を生給へる

事を取れざらハ工小云る天照大神の荒魂思ひ漏
和魂の大神小先立て生坐る理と等しきをハさればた
り者然るを儀式を閲小大嘗祭儀あり稻實殿條小為
採内院料枝向ト食山即祭山神云祭^畢造酒童女先
執齋弁伐樹工匠次之と見え次小向ト食野即祭野神
云祭^畢造酒童女先執齋鎌艾之役夫等^終訖之と有り
又大嘗宮條小吹谷為採大嘗宮御殿料枝云向ト
食山祭山神云祭畢造酒童女執斧伐樹夫等終之運
置次谷為艾同殿料菴云向ト食野祭野神云祭畢
造酒童女執鎌艾之と見え又次各燒藥灰云向ト食
山祭山神云とも有^{木草を採る爲小}山神野神を被祭る事ハ有れ

の政是を以て大神宮式
小凡採草神田種陸生
柄者毎年三月先祭山
口及木下然後採之
有山山神木下
下木神ふ其時
祭式小造遣使船木
置山神祭有が
其地て物を造時ハ
山神と木神と台を
云々

とも其本體と坐す木神草神と云て被祭さるを以思
ふ小其木草を採る山野を祭て木神草神ハ被祭さる
あり然レハ草野姫命の如きも木祖と云方少くハ草
野姫神と申し古事記ハ生野神名云亦名野椎神と
一ハ為られたれども野神と申す方少くハ此ハ亦名
野槌と有が如くハ同ト神ハ坐せども萱を野ハ
艾イの時ハ其艾採イ用る草神少くハ祭られず其艾
採る野神少く祭られ給へるを木祖句ハ迺馳神ハ唯
木靈ハ坐て山神と兼給ハさりけれハ右の度ハ少く
野神と齊しく被祭給ハさりける者あり所以ハ右ハ

口被殿取屋島の
八尋殿の御在
生て其小珍子を
生らせ給ひか事
を相議らせ給
ひけるより下ハ
日神の御事を改
以天柱を寧て天上
と有の思合より
可き事あり

引カ大殿祭詞あり木を採小就て山小ハ山神を
ハ祭れり少て其ハ過去一時の事なり今現ハハ御
殿と成れり上小就て木ハ久く逢命草ハ豊宇氣姫命
ハ祭らる少儀式の趣も右ハ同ト其ハ村と萱と
を採る爲ハ右の如く山神野神ハ祭られたれども其
大嘗宮の成記ハ所ハ既而中臣忌部率御平等祭殿
及門云々と有て其ハ大殿祭の事あり其所祭神ハ
木神草神を屋船命と称申せる事祝詞講義ハ註せる
ガ如ク然レハ上小引る寶鏡開始章あり山雷野槌ハ
神武天皇御紀あり巖山雷ハ巖野雷也其を採
ルハ山神野神少くハ木神
草神の方ハ非るが
○共議曰ハ八洲起元章ハ

〇〇古事記云伊弉册命
曰云々而此等生國土者
何云と見天に其等
當に神語云

〇〇古事記云伊弉册命
曰云々而此等生國土者
何云と見天に其等
當に神語云

共計日と有（八天邊橋の上の事あり）同ト彼ハ國土を生給ハ大義あるを此

△古事記云珍子を生給ハ大義を議給ハ故ハ共と有るなり〇〇吾

又神傳伊弉册命云々神功皇后御紀云々今皇太后有る群
臣皆從焉必其議之立也其也と有る大八洲國ハ更なり

山川草木ハ至る迄ハ生給ひテ不足ぬ所無く國體を

具へ給ふ由あり但古語拾遺ハ二神共爲夫婦生天

大八洲國及山川草木と有ハ記者の地より云々を此

ハハ共議曰と有テ二神の御語り然レバ山川草木

共ハ其神を生坐るあり其物を生坐る事著明ハ其

上ハ註る如ク生海生川生山と有ハ其物少ク其神ハ

ハ非るを本草の二ハ其神ハ其物ハ非レドモ

神の方よりハ物を主と爲ル故ハ木祖草祖と書レテ

ハあり故二神の山川草木を生と宣へるハ其神の事

と知ベシハ〇何不生天下之主者歟ハ大八洲國及山川

草木ハ至る迄ハ生給ひ訖テ今ハ其を統御す主と坐

神を生ずテハ得非トト深く御心を入テ慷慨セ給ヘ

ク故ハ反語を用ヒサセ給ヘリ者あり然レバ此

天下能主登坐神哀生給波邪良未夜母登天下之主ハ

詔給比氏と訓附テ其義を味フ可あり

下ハ生素戔嗚尊云々不可ハ君臨宇宙と有ハ對ヘ見

ベト第一一書ハ此の御言を吾欲生御宙之珍子と

有テ其ハ對ヘるハ第三一書ハ生素戔嗚尊云々勅曰

假使汝治此國云々と有る是少ク此國土を治す事を

此の書は...
...
...
...
...

〇〇〇〇〇〇〇〇
...
...
...

共計日と有（八天浮橋の上の事あり）同ト彼ハ國土を生給ふ大義ありを此
も珍子を生給ふ大義を議給ふ故ハ共と有る〇〇吾
己生大八洲國及山川草木と有り蜂兒淡洲ハ兒數ハ
非るガ故ハ其を除て其主と有る大八洲國ハ更なり
山川草木ハ至る迄ハ生給ひて不足ぬ所無く國體を
具へ給ふ由あり。但古語拾遺ハ二神共爲夫婦生大
大八洲國及山川草木と有ハ記者の地より云々を此
ハ共議曰と有て二神の御語り然レバ山川草木
共ハ其神を生坐るゝ其物を生坐る事著明ハ其
上ハ註ル如ク生海生川生山と有ハ其物少ク其神ハ
ハ非るを草木の二ハ其神少ク其物ハ非レドモ

神の方よりハ物を主と爲る故ハ木祖草祖と書レテ
あり故二神の山川草木を生坐宣へるハ其神の事
ハ非ず。〇何不生天下之主者歟ハ大八洲國及山川
草木ハ至る迄ハ生給ひ訖て今ハ其を統御す主と坐
神を生ずてハ得非トと深く御心を入て慷慨せ給へ
ルガ故ハ反語を用ひさせ給へり者あり。然レバ此
天下能主登坐神袁生給波那良未夜母登。天下之主ハ
詔給比氏と訓附て其義を味ハ可あり。天下之主ハ
下ハ生素戔嗚尊云々。不可（キミトラス）以君臨宇宙と有ハ對へ見
べト第一一書ハ此の御言を吾欲生御宙之珍子と
有て其ハ對へるハ第三一書ハ生素戔嗚尊云々。勅曰
假使汝治此國云々と有る是少ク此國土を治す事を

公の次子日神...
授以上之事...
奉祭天上...
へて天下...
者多し

續紀第七詔小天下君坐而...
云ふ...
○天下八万葉五...
志多麻波祢二十...
と有る依て訓へ...
洲國及山川草木と宣ひて次小天下と宣ふ...
其生坐る物の條目を分ち宣へるを此ハ其物を一...
惣括て宣ふ所ある故小天下とハ宣へり是古言あり
第六一書小素戔嗚尊者可以治天下也と見えたり
然るを西戎小天下と云熟字の有を取て其訓を此方
少て設たる語の如く云れたる先達の説ハ當り又
通證小引る呂氏春秋小有天下者天下之主也又穀梁
傳小爲天下主者天也繼天者君也ふどの文を取れ

公天孫降臨...
皇孫...
同...
其...
中國...
云...
百...
吾子孫...
三河...
事

ども此ハ然る理...
屈の所ハ非ず...
空中ハ一物成れる...
ハ上りて天と成れ...
と成れるが此...
の如く遠放て在...
の周る事ハ同...
小其判れ...
小對へて天下...
時ハ光高天原...
中間ある天之...
下と云る...
○主を伎美と訓來れ...
其實然る言あり

儲君とハ上カミと云義少く神と云も同ト事あり古事記
白檮原 小尔神八井耳命讓弟建沼河耳命曰云故吾
宮殿 雖兄不宜爲上是以汝命爲上治天下僕者扶汝命爲忌
 人而仕奉也と見えたる此ハ吾ハ子長コノカミと有れども上
 と有べりうず是を以て汝命ハ君と坐て天下を治賜
昔ハ忌人と爲し汝命ハ使ハ奉む
 へと云意あり此少く君ハ上あり事を明くむ可ト然
 れバ姓ハ某君某公と云も其氏ハ上カミなる事姓の連ハ
 群主あり意ハ思合す可ト君と上と同ト意ありむハ
ハ唯上ハ云て有ぬ可を君
言を換たるハ神も上と同言あり故ハ云別
たむ爲小神代より君と唱來ルあり此を伊邪那岐
の岐伊邪那美の美を合せて君と
云言の成ル如く云ハ妄説あり若て某公と云時ハ

小く其物ハ上なる耳あるを打任せて大に唯ハ君
 と申すハ天皇の御事あり其を大君と申奉るハ天下
 ハ相對ふ者無き謂少く大神と申すも其意異なる
 所無き者あり所以ハ天皇を始奉りてハ親王等諸王
 等ハ至る迄ハ且りて大君と申奉る事少く此天下ハ
 てハ如何程威權有ても人臣と有む限りハ打任せて
 君とハ称へりうず況て大君ふどもハ奴ハ云べり
 ざる神代よりの御定ありハ君ハ上少く神大君ハ大
 上少く大神と申奉る詞と同トけれバあり神と申せ
ど大神
と申せるハ勝れて尊き御上ハ耳申來る事あり中ハ
日神の如きは古語拾遺ハ天照太神者惟祖惟宗尊

公若て主字を常衣
志と云ふを此の伎美と
云ふ故志に所成して自
物を成し其物に主字
に事傳りて天神主字
の事云ふかかふるを信
美と云ふかかふるを信
と成す由あり

無二因自餘諸神者乃子乃臣孰能敢抗と有が如く甚
と尊く渡りて給ふ故に唯打任せ太神と太神
宮に申奉る此日神に限れる事ハ天皇を唯大君と
耳申奉る同自餘の諸神に尊じてハ其大神と申
す可く唯太神と耳申せば何然れば此に何不生天下
時ふて日神の御事なり然れば此に何不生天下
之王者歟と有ハ(天皇)と坐て天下の事を統御す可き
神を生坐むとの御事なり此善なりと御心に依て日
神月神素戔嗚尊を生奉り給へるが日神月神の御事
ハ二神の御心より外に奇異ハ大坐しつれば日神月
神と定奉りて給へりければ素戔嗚尊此天下の主
と坐大神ハ渡りて給ひける(其ハ其神の)事下云を見て曉る
可く但月神と素戔嗚尊ハ同ト神に坐せども
此ハ二神の御名の出たが任ふ云なり

於是共生日神號大日靈貴大
靈貴此云於保比屢咩能武智
一書云天照太神一書云天照
大日此子光華明彩照徹於六
靈尊此子光華明彩照徹於六
合之内故二神喜曰吾息雖多
未有若此靈異之兒不宜久留

此國自當早送于天而授以天
上之事是時天地相去未遠故
以天柱舉於天上也

於是共ハニ神相共ハ生成坐る謂ふるガ一書の傳ハ
の中ハ古事記と同トク日神月神ふどの珍子等の
御身滌の所ハ成坐る由ハ傳へられバ其トハ分ハ
為小云れたる少ク共字深く刀有リ。○生日神ハ日を

ハ和記ハ此云坐者是坐坐神也

生給ハ謂ハ非ズ天日ヲ所知者ヲ太御神を生奉給ヘ
るあり神武天皇御紀ハ天皇乃運神策於沖衿曰我
日神子孫而向日征虜此逆天道也云々と有を以て日
ハ天トシ日神ハ其を統御す神ハ渡るを給ハ御事を
知ベシ垂仁天皇御紀も倭大神の御誨ハ天照太
神悉治天原ト見えたる如ク皆同ト又万葉ニ卷あり
日女之命天乎波所知食登云々と詠リ記傳ハ此太御
神ハ今眼前世を御照ハ坐らす天津日小坐りト有
ハ天津日神ハ坐りハ偕日神の御生坐ハ御事を
先古事記ハ御身滌の末ハ至て清まり竟たる所ハ
成坐る趣あり此ハ第六書ハ右ハ同トク伊弉諾

公ニ卷ニ知之神世
有ハ天皇の御事
天照大神神ハ天日
知食ハ起ルハ各
平田前ハ五神
ハ仁明天皇御紀
長秋ハ重字を書

尊當滌去吾身之濁穢則云々然後洗左眼因以生神號
 曰天照太神復洗右眼因以生神號曰月讀尊復洗鼻因
 以生神號曰素戔嗚尊凡三神矣と有る實然も有ぬ
 可き事ハ有れども此ハ二神の共小生奉りし
 由小傳たる彼此二共小正一と云理有ハ非レバ何レ
 ヲ其片方ハ已ク誤れる傳ふる事決くらむ有ける
 又
 眼御鼻を洗ハセ給ふ事の後れて在も違ハカケ如
 其ハ水小降立てハ最前ク洗ふ所ありを遺一給ふ可
 小非レバ其も亦前後の次第を失へりと云べし然レ
 ハ第十書小干時入水吹生磐土命出水吹生大直日
 神又入吹生底土命出吹出大綾津日神又ハ吹生赤土
 命出吹生大地海原之諸神矣と有る正一りる可き
 然レバ於是共日神と有ハ對へて瑞珠盟約章あり日

神の御言小夫父母既任諸子各有其境と有て何方
 迄も二神の共小生坐る事を貫きたれば是が實小正
 説ハ有べきか古事記ハも須依之男命の御言小
 僕者欲罷此國根之堅洲國と有て御祖神を慕ハセ給
 へるも二神の共小生坐りし御子小坐故小其黄泉國
 小御祖神の往坐し事を可惜しにて戀慕ハセ給へる
 が故なり然れども記小伊弉那岐命大歡喜詔吾者生
 身滌の竟小成坐る由小ハ有れども然らず彼を誤傳
 と見時ハ此小伊弉諾尊伊弉册尊共議曰吾己生大
 八洲國及山川草木と宣へる其御子等を古語拾遺小
 生いて於生終と見て甚能通ゆる者あり

△其合所生と
云ハ靈異記ハ家
長兄云汝與我之
中子相生故吾不
忘汝云故其合
相生子各云ハ
有テ夫婦ト相
生成るを云あり

木次生日神月神最後生素戔嗚神而素戔嗚神常以哭
泣為行云（公三神）勅曰云々と有テ此書ハ國史家牒ハ無
異ある傳を載らるハ主意あるハ其すハ此正書の傳
の外ハ取る所無リ故ハ此文を舉ぐれて違ふ所無
シ又皇太神宮儀式帳ハ此掛畏天照坐太神月讀之
神ニ柱所稱伊弉諾尊伊弉册尊共為夫婦合所生神ト
有テ神宮の古傳ハ右の如く有テ古事記又第六二
書の如く左右の御眼より日神月神の成坐りトハ傳
ざりト事炳焉ト太神宮式ハ伊佐奈岐宮ニ座（太神宮北三）
里伊弉諾宮一座伊弉册尊一座ト有テ其御父母神の

別宮小親ト齋られさせ御在リ坐す所由をも思合
可（舊事記）ハ此正書を取テ二尊俱議曰吾己
坐大八洲及山川草木云々（生）日神云々ト云
テ又下ハ御身浴の所ハ古事記の文を舉ぐルハ此も
彼も捨ざる心得ハ有べけれど同神の生坐る御
事を二度云然れば何れの時ハ生坐るありむと考る
小第六一書ハ伊弉諾尊與伊弉册尊共生大八洲國然
後伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹
撥之氣化為神云是風神也ト有テ祝詞ハ天御柱命（及神名式ハ依ハ風神）
國御柱命ト稱せらるハ此次ハ以天柱舉於天上也ト有
レバ日神を天ハ送奉りハ風神を以任一給への
知（レ）了れハ然ハ風神の右の如く御氣より化坐

れバ日神ハ一ノ二神ノ御子ノ長カハ坐リ其ハ大八洲國及山川草木を生坐ル即其天下小君主と坐む神を生給ソむと思テ入て生坐ルケ日神と坐小依て天ハ送奉ル一ノ二ノ其小因て日神ノ御子ノ継天下小君主と坐事と成ル其ノ此小始ルを見ベ一斯レバ日神ノ以前小生坐ルハ風神ニ柱耳なり又此小次ベ一ノ文を稽ル第二ニ書小日月既生云次生素戔嗚尊云次生火神軻遇突智時伊弉册尊為軻遇突智所焦而終年云云と有小續けり其ハ日神月神等を生一て各其勅任一ノ事をも竟て後小火神を

生給へる云々の事小依て伊弉册尊ハ黄泉國小罷向ハ一ノ二ノ日神月神共小伊弉册尊ハ實小生ノ御母小坐り右小引ノ儀式帳小合所生之兒と称るを思ふ可一斯レバ伊弉册尊ノ黄泉國小罷坐ル項小ハ日神ハ己ク天上小上リて唯月神亦名ハ素戔嗚尊ガ御父大神小附從ひて此國ハ坐ルける備此月神素戔嗚尊と二柱ノ如ク出たれども其ハ誤ある事先師等ノ説ノ如ク故此小是時天地相去未遠と有も大も其一神を擧て云ベ一八洲國及山川草木を生給ひ畢ル即と見る時ハ甚能合ひ第十一ニ書小天照太神在於天上曰聞葦原中國有保食神宜尔月夜見尊就候之と有る保食神ハ第二ニ書小軻遇突智娶埴山姫生稚産靈と有る其神ノ

古事記卷第二書
水滌の事

子みれば已く日神ハ天上小坐て其神の生坐る消息
ハ見行ハさざりク神使を遣て月見守て令者給ふあり若
水滌の時小生坐るありむハ此國土小在ハ事ハ所
知者べければ殊小如此く其を令者給ふ可ハ非ル者
をヤ第六二書小伊弉諾尊の三子小勅任ハ給ふ所小
是時素戔嗚尊年已長兵復生ハ極鬚髯雖然不治
天下云々吾欲從母於根國云々有ハ信小御水滌の
後小在ベさハり然れば天照太神ハ生坐て直ハ天小
上リ給へれば本より此國ハ在ズるを素戔嗚尊
者可以治天下也と有ガ如く國土ハ其神の治す可キ
御勅任ハあり依て御父母小從ひて坐ハりて御
母神の根國小罷坐ハりて還り坐ハり後小打出セ給へ
るハ御父神の黄泉國より還り坐ハりて給へるハ給へ
るハ依て逐れ坐ハり依て天小參昇ルを給へるハ給へ
る有リ然れば第六二書及古事記小日神月神等の御身

滌の時小成坐ると云を非ずとて其捌ハ如何と云
小伊勢の書共小遺水り御鎮座傳記小伊弉諾尊到筑
紫日向小戸橋之憶原而被除之時洗左眼因以化名曰
天照太神之荒魂荒祭神是也と有り倭姫命世記小荒
祭宮一座皇太神荒魂也伊弉那伎大神所生神名八十
枉津日神一名瀬織津比咩神是也と見えたるが如ク
右の傳記の文ハ御鎮座次第記御鎮座本縁等ハも出
たれども共小洗左眼因以生ハ日天子是大日靈貴也天
下化名云々と有れども其ハ此傳の紀記ハ合ハる
故小其文を取れルが然スるが小神宮の古傳をハ捨難
くハて兩説をハ一又本縁小復洗右眼以化生名曰天照太
神之和魂也被戸神伊吹戸主神是天照皇太神第一撰

神多賀宮是也と有を世記小伊弉那伎大神所生神名
伊吹戸主神亦名神直日大直日神是也と所見たる小
て著此ハ天照太神の和魂小坐を太神宮式小多賀
宮一座豊受大神荒魂と有ハ故有テ事あり其
ハ祝詞講義小云カガ如ク此文傳記次第記小有レ
ども其小ハ洗右眼因ハ生月天子云々有レども其
ハ誤ルレバ取テ此を御鎮座本記小ハ又傳記小洗鼻
即大神分身坐云々とも見えハカク又傳記小洗鼻
因以化生神號速佐須良比賣神土藏靈貴也與素戔
鳴尊合カ座給也と有を伊勢國查藝郡尾崎神社記小
傳記并天地神祇記を引ク小ハ右の文小次て是即素
戔鳴尊和魂而分身御子也と有レバ此此ハ第六一書
及古事記ハ正テ可ク唯伊豆能賣神ハ何レ小收む

此ハ古事記トモ見テ知ル

と思ふ小古事記の次第の如く禍津日神直毘神の下
小在べけれバ左右の御目を洗て御鼻小至る迄の
間小成坐る小佐須良比賣神の上小在べと事云も
更あり此少テ御身日神月神ハ將の時小成坐るありぬ事を曉る
可但右小引るハ五部書と云テ惣ハ信難書
小ハ有レども朝廷ハ己ク傳を失給ヒ一事の
神宮小ハ傳ハ其ハ紀記小合ごり
小如何のトシテ神宮の傳も捨テ朝廷のも本あり捨
ざる爲小文を取合せて續けハ續けたレども然す
小拙く物爲る故小後の加筆ハ詳小見元分々故小
今改テ然レバ日神ハ一も伊弉諾伊弉册二神の國中
引出之天柱と爲給ヒ一破馭盧鳴の八尋殿小大坐て生
奉給ヒけるを此時天地と判れて後未幾許も有ごり

相持たせ給ふ義を以て此ハ其大御光を受奉る國土
より称奉れる大御名と伺ひ奉るるあり其ハ日神
の坐す高天原ハ一六合の内ハ大御光を放たせ
給ふ天日ハ有りて常在ハ其處ハ居て動く事無れ
ハ天上ハ於て晝夜相代と云事ハ無と此大地ハ一
天日を中心として一歳の公運を爲す作も又一日一
夜の私運を成て天日ハ向ふ間を晝と云ハ天日ハ背
く程を夜と云ハ依て其晝間を持たせ御在ハ坐す由
みれば此國土より然称奉れる大御名あり事申すハ
更なり然れば此屢ハ日有と云義あり古事記沼河日
賣歌ハ所遠夜

麻迹比賀迎ハ良婆奴婆多麻能用波伊傳那牟と有カ
如く國土してハ天の動靜ハ抱く事唯其見ル所を以
云事古より今ハ至日と申奉る言義ハ唯日ハ火あり
とて事も無き状みれども然る女縁あり事ハ非
るあり其ハ神世七代章第四一書ハ高天原所生神名
日天御中主尊次高皇產靈尊次神皇產靈尊と有る御
も皇も共ハ称號ハ非ず美ハ精ハ天地萬物と成
べし精ハ妙あり物あり其物を成て其中心ハ主宰と坐故ハ天
御中主尊と申し又其精を相共ハ產生ハスバハ天地萬物を相
銘造る故ハ高皇產靈尊神皇產靈尊と称奉れる
事あり日ハ即精と云事あり又皇產靈此ハ美武須毘

と有る武須ハ産多り毘ハ靈多り美と通ひて精の義
ハ天地萬物の精靈の義と成れるを天を阿米と云
ハ亦明靈の意を兼たれば美を毘ハ比ハ通ハ
て日と云言の成れる者多り偕天地初判れたる傳
三傳四小時註せらるが如く天日と大地と判れたる
事多きを其判れて後ハ其天地の相去事未遠うと
りハ間ハ其主神も定らざりけり日を日神の生坐て
天上をバ所知者ハ至て右の三神ハ幽ハ立給ひ顯ハ
ハ何方迄も日神 君とハ定り給ひける故ハ六合の
光輝ハ此太御神の靈威とハ成れるける者ありけり

其ハ日神の未生坐ざり以前も三歳と云ひ時日
と云事の有を以て天日ハ本ハ在て寒暑晝夜も成
せらるを知べし寒暑有ハ非ざりて何をり歳とハ云む
晝夜有ハ非ざりて何をり時日とハ云む然れども日
神の其を所知者ハ初給へる後ハ其天日より光を
放ちて世中を御照し坐らす御事ハ其太御神の御業
あり事申す 雲ハ万葉ニ廿七ハ天照日女之命一云指
命と有て女神ハ渡らせ給ふ義ある事今云限ハ非れ
ども月夜見尊の見ハ相對へ見ハ咩ハ所知者の義を
も兼たる可ハ其ハ太神宮祈年祭詞ハ皇神能見霽志
坐四方國者天能壁立極國能退立限青雲能靄極白雲
能墜坐向伏限と有る見霽ハ所知者ハ開けり御在り
坐る由あり又寶鏡開始ハ引る御紀の天照太神あり

皇御孫尊^三神寶を授賜へる御言小皇孫如八尺瓊
 之句以曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山川海原乃
 提是十握劔平天下兵と有る看行^{ミツカシ}も所知者の義あり
 を曉る可^一記傳七^{十七}小所知者の看ハ見すあり見
 を美須と云ハ見賜を美志賜と云ふ一の古言あり例
 ハ万葉^一三^十小植安乃提上尔在立之見之賜者六^{十三}
 丁^二小我大王之見給芳野宮者十九^{三十}九^十小見賜明未^米多
 麻比又見之明良年流多と有り借此見之を賣之と
 通ハ^一云ハ^二五^十小召賜良之神岳乃山之黄葉乎
 云^三明日毛鴨召賜方音十八^{二十}三^十小余思努乃美夜乎

安里我欲比賣須^{二十}五^十小賣之多麻比安伎良米多
 麻比又^一六^十於保吉美能賣之思野邊尔波多と有り斯
 ルバ所知者みどの看ハ本ハ物を見^二車ありを國を
 治め有り坐事小通ハ^一用多由ハ上小云^三カ如^一
 又^一二^十小藤原我宇倍尔食國乎賣之賜年登^二三^十四^十
 小吾大王乃所聞食見爲替文乃國之みど有^一て愈明
 け^一採^一要^一と有^一て咩^一所知者の義有^一を知^一べ^一傳^一記^一
 七^一小大日靈貴の靈ハ美^一通^一ひ^一持^一の約^一れ^一あり月
 夜見の見^一對^一へ^一て知^一べ^一と賀茂翁説を擧^一れたれ
 とも持^一より約^一れ^一とハ餘^一リ能^一武智^一ハ之^一貴^一あり日^一を
 小^一迂^一遠^一あり如^一く聞^一ゆ^一め^一能^一武智^一ハ之^一貴^一あり日^一を
 所知者の最貴あり由あり瑞珠盟約章第三^一書小以

日神所生三女神云々今在海北道中號曰道主貴と申す
神名も有り然る小寶劔出現章第二之書小大已貴
此云於褒姒娜武智と有る式小大已持神と有り此
小因て思ふ小道主貴ハ道主持あり大已貴ハ大名持
あり武智と母智と相通ふ事知べし武智麻呂公傳小
藤原元大臣諱武智麻呂云々取茂榮故爲名と有る物
を持つ事の榮えある由あり此の貴も亦此小同ト又
事記小八嶋年遲神と云るハ八嶋持神の由あり其友
母智能加微と有る字氣瑞珠盟約章第十一書小此云字氣
貴神と見て違ふ事無し貴ハ持あり天日を有る也給
ふ由あり瑞珠盟約章小見えたる天照太神の素戔鳴

尊小詔給ふ大御言小夫父母既任諸子各有其境と有
りて灼然然れば大畫之所知者持たせ給ふ偕之貴と申奉る義あり天照
太神と申奉る如く受張たる大御名ハ坐すハ此
大御光を受奉りて晝夜の分別を爲す此國土より称
奉れる少く一乃葉小指上日女之命と申すも祝詞小朝
日能豊逆登と有る如く大地より見小却て天日の指
上る意を以称奉れると同一類と爲べし又年中行事
秘抄ハ鎮魂歌小豊音雲と称奉れるも豊逆登の例
ありて日の動ミ乍升る意の申し成ハあり能ハ例無グ
如くと雖も道主貴ハ能武智と訓附たれば其任小
在べし強ち小大已貴ハ嶋年遲の例小耳泥む可ハ

非^らず^ら ○天照太神記傳六^{七十}此御名を一書日と
記し給へるハ僻事あり亦名と有へる事あり其故ハ
此より次ハハ何方のモ唯天照太神と耳記給へれ
バ一書の説ハ非ず若一書の説と爲バ前後相違ハ
カをやと云れたるハ然^ら言^ふり 高皇產靈尊の御名
の如きも神世七代
章ハ第四一書ハ在^て正書ハ無^を下^の天孫降
臨章ハ出^給へる^も此^紀ハ^彼此^有る^事あり然^レ
バ此^レ此^大御名^を主^と被^立て^大日^第六^一書^第十^一
靈貴^をハ亦^名ハ被^置べ^る事^{あり} 第六一書第十一
一書ハ天照太神と有^て瑞珠盟約章より以下ハ神
武天皇御紀ハ一所大日靈尊と有^る耳少^く自餘ハ何
れモ其定^{まり}古事記ハ何れモ天照太御神と記^し

奉^るハ古語を違^へトとの心^にら^るり祈^奉月^次祭
詞ハ初^ハ天照太御神^能太前^亦白^久と有^て終^ハ荷前
者皇太御神^能大前^亦云^くと有^れバ古^ハ天照皇太
御神と書^奉り^しあり^しり其神衣月次神嘗等詞ハ
天照坐皇太神と有^て儀式帳亦右^ハ同^ト斯^レハ御紀
小文を約^めて天照太神と書^れし^{より}字^ハ其^ハ後^ハ
事^{あり}れ^{ども}其詞ハ太御神と記^て記傳ハ御を正^{しく}
美^に訓^を神^の迹^を清^く讀^奉る^可し^と有^るガ如^く唱^來
れり^し者^{あり}の^緒天照太神と申^すと伊勢太神宮と申^す
す^ハハ大^字尋^常の如^く大^とハ書^すし^て太^と書^奉り

て自餘の諸神小分ち奉る古よりの故實ナラハシ少く古書皆
 然り慎み守りて私為べり式令可き者あり其公
 見べし太上天皇太皇太后太皇太妃皇太后皇太妃皇
 太子ふどハ太と書れたり其ハ掛りくも畏き天皇
 尊の大御族小限奉りし事あり予一昨年後陽成院天
 皇の天照皇太神と書せ給へり掛軸を得たりハ太字
 を書せさせ給へりを見奉りしより自物小書み人
 の書を引ハ大と誤れりハ太字小改て引り其ハ
 此天皇尊ハハ此御紀の清原國賢朝臣の跋小欽准
 陛下寬惠叡智之餘後世惜其流布之不廣遂命鳩工於
 是始壽諸梓矣と有が如く吾輩の仕奉る皇大御字を
 興起し給へり現人神小坐せハ必故實を原ね御在
 ての大御所業と思測奉るが故小予ハ何時も其故實
 小神習ひ仕奉りて太字を書く者あり見む人怪しむ
 事勿れハ天照ハ寶鏡開始章第三二書小妻ハ鳴尊白日
 とハテラシクシテ
 神日請妙照臨天國自可平安と有少く其義明しけり

記傳六七十小照ハ氏良須と訓べりハ万葉十八三十
 安麻泥良須可未と有り氏流と訓むハ誤小ハ非す神
 名帳小對馬國下縣郡阿麻氏留神社ハ見元神樂歌小
 阿万天留也此留女乃加美乎と有り此ハ天を照すと
 云とハ少一異少く唯氏流を延て氏良須と云古言の
 拾ひし立を多須と云が如く天照と云ハ天小坐て
 照給ふ意少く高光と云小同三代實錄元慶元年藤
 小仕給ふ宣命小朕我食國乎平久安久天照之治聞食
 須故波此大臣之カ奈利と有る此ハ此太御神小在り
 へて天皇の天下を所知着をも天照と云り珍しき
 詞あり以上取意ハ今云中臣壽詞ハ與天地月日共
 照志明良志御坐事と見えたりハ諸太神と稱奉る事ハ
 仁云ハこも有り

一甚御尊の限無く八百萬千萬神と多き中
ても殊小勝れて高く可畏く大坐くが故あり他神小
も大神と申すも多在れども殊小大神と称奉れ
ハ古語拾遺ハ天照太神者惟祖惟宗尊無二因自餘諸
神者乃子乃臣孰能敢抗と有が如き所由小依る事ハ
其祀祭り給ふ因ハ云リ又ハ幣帛などを進らり
小就て崇の申させ給へるを始終小貫して太神と称
奉るハ此大神小限る事あり故ハ中古より御定小
く其御靈を齋奉らせ給ふ伊勢大宮御事を唯小太
神宮と記し習へる事續紀以下の書共の記し様悉く
然此大神の高天原を所知食し初てより皇祖と御在
し坐す高皇産靈神皇産靈二神と申せども太神を主

と崇まへ御在し坐して萬の大御業を輔相ひ奉らせ給
ふ事天孫降臨章及神武天皇御紀ハ所見たるが如し
然れバ甚可畏き申し事ハ有れども天御中主尊と
徳を合せ大坐くるありとも知べからず其ハ御中主
と申すハ天中の主宰なる由ハ其同ト高天原ハ天照
大神の君主と坐むハ一國の二君有る異あり
然れバ天御中主尊ハ天照太神の隱身天照太神ハ
天御中主尊の顯身と心得て此を一柱の如く思成し
奉れバ違ふ所非る可あり所思たる
此事傳四天御
中主尊の下
云々を猶傳十第六ニ書枉津日神直日神の御事ハ就
て高皇産靈尊神皇産靈尊の御事の結を云を合せ讀

△白大神ハ稱奉れ
るハ白王ハ高天原
を統所知者ヲ謂
ふハと思ふハ

味ふ可い。○天照大日靈尊天照の説右の如い。大日靈
 事なり。○天照大日靈尊天照の説右の如い。大日靈
 大日靈尊の貴を者るなり第一二書又神武天皇御紀小大日靈尊と
 有り猶鎮魂歌小豊日靈尊カ葉一小天照日女之命指
 上日女之命なり出神樂譜小畫目曲有し其歌小阿万
 天留也比留女乃加美乎と見え古今集大歌小畫目歌
 と云も有て其例甚多き事なり寶鏡開始章小雅日女
 名式小山城國葛野郡天津石門別雅姫神社名神大月
 次兼嘗も有る此神の事なりハバ日女を姫と訓へし
 偕天照と冠を奉るハ天津日神と天坐して世中を
 御照し坐す全體の大御名ありを大日靈と申奉る
 八月神と相並ばして此大地の晝夜を持分て所知者

△美比加理宇流波
 △心久生三白と訓
 △皇太神の質性
 △一て具
 △安閑天皇元
 △年御紀小光華
 △多光華を比加理
 △宇流波志と訓
 △欽明天皇十四年
 △御紀小光華見
 △曜如白色と見
 △元光華を
 △宇流波志と訓
 △或説小光ハ明カ
 △リハ又ハ火明
 △クハ又ハ火明
 △二百ハ十ハ十ハ十ハ十
 △見て知へし

大御名とを重複して称奉るあり此例猶有り右小
 津石門別と亦名を重複して一引る雅姫命小天
 聯小申すふと小同トあり○光華明彩大御光の
 明彩ハ大坐ハあり第一二書小即ハ日靈尊及月弓
 尊並質性明麗故使照臨天地と有る明麗ハ當れり通
 小光華見文選詩明彩見鮑照賦と有り但け小實ハハ
 此ハ其字を用ひて言を移せるハこう有る天地間ハ二
 無く至尊太神の御上ハ余りハ光華を比加理
 奇異ハ實ハ當べき字の無きあり光華を比加理
 と訓ハ照の義あり古事記日代小多迦比迦流比能美
 古と有るカ葉一二丁小高照日之皇子と有る以曉る
 可ハ又猿田毘古神の事を上光高天原下光葦原中國
 云る光字を照の如く訓來れるハ其語意同トなり

△記玉垣小糸具
肥長比賣光海
原自船進來と
有り又同

故あり此太神ハ照徹於六合之内と有ハ他小准ふ
可き事ハ非れども神の御身より光を放て給ふ
例を一二云ハ寶劍出現章第六一書小千時神光照
海忽然有浮來者曰云く吾是汝之幸魂奇魂也天孫降
臨章第二二書小味耜高彥根神光儀花艶映于二丘二
谷之間と見え又猿田彦大神の事を口尻明耀眼如ハ
咫鏡而絶然云く時有八十萬神皆不得自勝相問と有
り又神武天皇御紀小至吉野時有久自井中光而有
尾云く臣是國神名為井光と見え古事記遠飛鳥
宮殿小輕
大郎女の下小御名所以負衣通王者御身之光自衣通

△清言消魂去度
不能仰見

出也と記され雄略天皇御紀小天皇産而神光滿殿と
有ふと神ハ更ハも云ず現入神ハも如此く御光坐る
者多きを況てや天地の内を御照し性す日神の大
御光ハ如何小在けむ御父母ニ神す小未有若此靈
異之兒と宣給へる者を如何ハてり思測り得奉る
む唯可畏くも其傳を穿る外無き者あり桓武
天皇
御紀和氣清麻呂卿傳小弓削道鏡の事小就て宇佐小
被詣し所小神託宣云く清麻呂祈日今大神所教是國
家之大事也託宣難信願示神異神即忽然現形其長三
大許色如滿月云云と有り色如滿月ハ其御光を放
たせ給ふ明彩ハ麗美の字の如くありハ此ハ唯小其
大御容儀の麗美ハ坐す耳ありハ其天御光輝の

又古事記國作殿
大穴牟遲神の事
と成る處北天而出
逆行
神來

の靈異小明彩く大坐くあり右小引る神元照海
又神光滿殿の類あり信小宇宙の間小於て天日の大
御光計り妙小奇く麗美く物ハ非レバ然申傳へ
けむハ諾ある事小ふ有ける凡て宇流波志とハ得
愛少て物小在れ事小在れ心小愛しと思ふ事を得る
義ふれば二神の此時の御心想像り奉りて其味を知
べ傳十第六二書小就て説べ事ふれども少り云
有る愛ハ古事記遠飛鳥宮殿歌小宇流波斯登依泥斯
依泥氏婆と有て一あり人小親びて宇流波斯と云る
あり其石戸殿小我那勢命之上來由者必不善心と有
ハ心の美醜小就て云るあり此の寶鏡開始章第三二
書小項者人雖多請未有若此言之麗美者也と有ハ言
の善きを云るあり天孫降臨章第二二書小味相高彦根

彦根神光儀花艶云くとも有ハ人の容儀小就てあり
古語拾遺小鏡を次度所鑄其狀美麗と有ハ物の形狀
小云るあり何れも○六合之内ハ鈴屋大人の神代正
皆同意ふるあり語小阿米都知能字良と訓れたる小鏡ふ可一寶鏡開
始章小天照太神乃入于天石窟云く故六合之内常闇
而不知晝夜之相代と有を以其訓の當れる事を知べ
其第三二書小天手力雄神侍磐戸側則引開之者日
神之光滿於六合諸神大喜と有る六合をも然訓べ
事云も更あり右等を何れも久迹能字知と訓む事小
ハ有れども久迹と云て天地を兼へくも非レバ僻訓
あり但神武天皇御紀小蓋六合之中心殿と有ハ久迹
能母那迦と訓べと所見たり伊勢の御鎮

座本縁小此文を引て天地四方謂之六合訓之云久迹也
也此有ハ中古小古言を失ひて然訓ハ依ルカ
此訓ハ謂レ無キ事アリ通證ハ六合之字内出莊子梁
元纂要天地四方曰六合と有り字の出所ハ然言ハ
然訓レたカハ万葉十五三十四小安米都知乃曾許比
能字良尔と有る其ハ天地乃底方乃内尔の義多れば
底方の語を去て天地之内とハ讀レたカ者アリ宇良
ハ其底方を天地の極とシテ其内裡ウチ多義多れ但
此ハ生坐ト時の御事耳カ天上小在生て世中を
御照レ給ふ御時迄ハ係て心得ベキ事多然ルカ
ト天日の大御光の行徹ハ其天の中央ミナ少謂ゆ
ル天地六合之内カるガ其底方ハ天底多事傳四十九

△又其天底多事傳
ト本より有レト非
ト神の造て立給ハ
ト知ヘレ

寶鏡開始章三
二書小日神之光
滿於六合之内と所
見ハ満字ハ當
レリ若て具満字
ト万葉二十四天
地日月與満將行
神乃御面跡九
望月之満有面輪
ルと有て多流
と訓せたら多流
ハ照の義多レ備
此ハ照徹と云ハ
具

丁天底立尊の下小説ハ事の信多を知ヘキ者多
但右の如く天日の大御光の及ぶ天ハ限有れば其
限無キ退方カ至てハ皇太神の所知カ御世の外
と思ふ不然カ皇御孫尊ハ皇大御國小大坐して其
大御政ハ皇大御國限カ行渡カレども其實ハ四海萬國
を統御す御爲ハ渡レセ給ふト同ト趣多りと知ベ
此二共小能く人の心得誤ル事多れば心得置ベキ事
多リ近頃小至て却カ天文多を學ぶ輩多
推量りの妄説を構へて日神を茂如カ奉り天皇ハ尊を
茂如カ奉るハ神代ハ然ル明カ古傳の有を得
知ざる僻事ハ
り甚切可畏 ○照徹ハ大御光の至カめ隈無く行渡
リと云て万葉十九四十四天地尔足之照而ト有と同

ニカ華ニテハ健男
之念也而隱在其
事天地通雖光所
顯自八方と有る
通ツ向一允恭天
皇七年御紀ハ第
姫容姿絶妙無雙
艶色徹衣而見之
是以時人号曰衣通
即女と有て徹を
通と作レナリ
此徹を透と作レ
帝臣風土記ハ有
嶋郡童子女杉原
古有年女儂子云
立額容端正
光透知里と云
有リ徹字ハ

ト意分り同一ニ丁ハ天原振放見者大王乃御壽者長
久天足有と有ハ振放見者と有ハ何リ標當と爲る
物有ハ熟思ふハ天足有とハ天日の照徹ハ事
然宜ひげむも知べからず天足有ハ天照有と通ひて
聞ゆめり此ハ就て思ふハ允て照と云語の本ハ足と
ハ本ありて阿良波須又此迦理阿伎良迦那理又都
隱ハ迦那理ハ物多訓ハ中ハ阿良波須と云ハ此ハ
ルハハカハ大抵ハ光多訓ハ如ク體言ハ非ずて天照
とハ國照とハ照海とハ何れも用言ハ用ひたハ例を
推ハ天照ハ天足國照ハ國足照海ハ足海少て其光の
顯レて行足ハ徹ハ名義抄ハ伊多流と訓て其大御
義と見えたり

の所在を經て遙ふる方ハ及ぶを云ふハ古事記遠
ハ登富禮と有て出雲風土記ハ多神名ハ衝杵等乎留
比古命と有ハ衝杵の徹と云ハ事ハハ徹の假名ハ
登袁流と云ハ先ハ思ハ○二神喜曰ハ事記ハハ此時
伊邪那岐^命大歡喜詔吾者生生子而於生終得三貴子即
其御頸珠之玉緒母由良迦志而賜天照大御
神而詔之汝命者所知高天原兵事依而賜也故其御頸
珠名謂御倉板舉之神と有て甚美好とを御紀ハハ傳
ハハ漏たるハ甚ハ可惜ハ事ハ今女ハ云むと云
其御頸珠ハハ傳七十四ハ云ハ如ク珠ハ足真と云
事少ク神の御靈を取託る器ハ然レハ高天原を事

依し授奉し給ふ大御璽と爲て賜へる伊弉諾尊の
 御璽實少し彼草小天神謂伊弉諾尊伊弉册尊白云
 迺賜天瓊戈と見えたる天神の御璽實の天瓊戈ある
 と同し事あり記傳七賜天照大御神の下小凡て多麻
 つむ故其物を賜物と云言ハ此御頸珠の故事より出
 小然る言ふが其賜天瓊戈小始れる事傳七ハ註
 年邊神の逃出坐す時即取持其大神之生大カ生弓
 矢及天沼琴と有ハ自持出給へるハ有れども後小
 其大神の追至坐て意禮爲天國主神爲宇都志國玉神
 云と事依し賜へれば此ハ然ハ賜ハ由ある其
 天沼琴ハ天玉琴と云むが如し然ハ右の天瓊戈御
 頸珠天沼琴又天璽のハ坂瓊曲玉るど同一徹めて何
 れも物事を入小寄るハ必有る古の制あり者あり
 玉緒母由良迹ハ記傳小緒小貫る玉共の相觸つて鳴

る状を云ひ取由良迹志ハ御手小執持して令瑒ミナカ
 り舊事紀小十種神寶を由良由良止布留部と云ふも
 同し有が如し思ふ小此ハ鎮魂の事して天照太御
 神の大御璽を殖賜へる神業あり此を古語拾遺小凡
 鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡と有ハ其式の定めを
 云小ころ有けれ其事の起ハ此小在り其ハ祝詞講義
 小己少も云るが今女云む小江家次第鎮魂小神祇官
 一人進結糸納於葛宮自二此間女官藏人開御衣管振
 動と有御衣管を振動く事ハ此の御頸珠ハ
 御裝束の玉ある小其を振動り給へる故事の傳ハ

△山野宮年中行事
 鎮魂祭件小弘仁
 弘仁神祇式小當目薄
 暮内侍御衣管之向
 官内省衛守元之間
 藏人開御衣管振
 動也又

舟後風土記に依り
郡高橋郷本所
以覽高橋者夫亦
語命於倉部山
上創營神庫設
藏種と神寶設
長孫以為到其屆
之科故云高橋と有
り此の依て高倉
命の名有り又神
名云謂ゆる山城
國綴喜郡棚倉
孫神紅月と有
八同神の生を万葉
十九丁の多奈久
良能野と有ハ
其倉の依て地名
と成れりて倉板
擧と棚倉と一不
り

此の遺制ありを以知りれ又鎮魂祭を美多麻布理と
云も玉緒母由良近取由良迦志と有が如く玉緒を振
動りて太御神の大御靈を振動りて勢の奉給へ
る小起れる称あるを思ふ可く猶寶鏡開始章第三二
書瓊瓊杵瓊の下の委く説るを以知べき者あり
の神事ハ多くハ天石窟の時小始れる状あるを此鎮
魂小於てハ如此く伊弉諾大神小始て出來れるを皇
太神も瑞珠盟約の時小行ハせ給ひて御子を生給ひ
天石窟の時小ハ天鈿女命の其を被行て皇太神を招
奉りてハ其の愈其式定れるを後小大神の御許より
饒速日命を天降し給ひて神武天皇小傳奉れる朝
廷の御式と成れる由あり謂御倉板擧之神と公記傳
祝詞講義小就て明む可く
小御祖神の賜ひし重き御寶と為て天照太御神の御

△軍防令ハ凡軍
器在庫皆造棚
閣安置と有る義
解ハ謂棚閣也
閣標閣也と有
ハ似たり

倉小蔵め其棚上小安置奉て崇奉給ひし故の御名ふ
り可しと有が此ハ天瓊戈の天神の御靈あり御靈實
ありが如く此も高天原を御依りの御靈ありて又二
神の御靈實あり故小殊小齋蔵を建させ給ひ其御棚
小齋置りて親しく仕奉りて給へる由あり自他の違
ハ有れども天孫降臨章第二二書小天照太神手持寶
鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可
與同床共殿以為齋鏡と有小思合す可く又此事小因
皇大宮小齋奉りて給ふ御殿を畏所と申す事と成て
後小ハ畏所と申すが大神名の如く成れると此の其
置所小依て御倉板擧之神と又朝廷の御式小十一月
申させ給ふと事の趣又同ト

○日本書紀傳八

○四十

中寅日小鎮魂の大御政を取行かせ給ひ十二月小至
て其御魂宮を齋戸小齋鎮給ふ事の起原も亦是小在
り然れば此ハ御祖大神の勅任一の大御璽を其天御
靈寶と齋奉らせ給ひて皇太神の大御璽を鎮させ給
ふ齋戸の神と申す意小見る可ありハ洲起元章小見
えたる如く天神
の御靈寶の天瓊戈を碓敷盧嶋小衝立て天柱と齋
柱とし齋奉らせ給ひて其を二神の御心の鎮と成
て傳づ給ひし事傳七卷三十四丁小云るを見合せ
て曉る可し此段の事共を凡て彼章小合せ味ひて大
小助と成る。○吾息雖多ハ二神の何不生天下之王者
事少りしらず。歟。宣へるハ唯天下の主と坐む尋常の御子を坐
むと所思しを所思しよりハ猶勝りて奇異小

△此言の事傳ニ
十一百五十五頁

生坐一ハバ如此く多小御子ハ坐せどもと彼大ハ洲
國及山川草木ハ迄係て宣へるあり鎮火祭詞ハ國能
ハ十國嶋能ハ十
嶋乎生給比ハ百萬神等乎生給比此ハ有るハ百萬神
ハ其國ハ嶋ハ屬ハ枝神ハ其
並宣へる。雖多ハ依波那禮母と訓其恒ハ葉一
ハ今坐母と訓
十八小國者思毛澤ニ雖有と有を始りて甚多々語
あり六ニ四十小國者霜多雖有里者霜澤ハ雖有と常小
對云ふ事あるが依波ハも意富ハも多字を數多用ひ
たるハ同ト狀の語あるが故なれども言の行く所異
る可し意富ハ覆りて大ハ以て小を惣るあり依波ハ
塞サりて小を以て大ハ至るが其歸く所一ハ成る

△清寧天皇御
紀小於諸子中特
所靈異と見え
又

り然れば同一意かぐろ多か一圓けか云故小大
謂る故小意の細り
訓り例公丹後風土記小天梯立の成れ事先名天
梯立後名久志瀆然云者國生大神伊射奈藝命天為通
行而梯作立故云天梯立神御寢坐間伏仍怪久志備
坐故云久志備瀆と有怪久志備是神の御心小然所思分り上此日神の御有も註る
如く二神の御心ハ唯其生成坐一六八洲國及山川
草木を統る主と坐む神をと思り凝して生成坐る
が中ハ小天下を所知着す計の神ハ坐せず其大神
光輝の麗ハ一く坐て天地の内ハ照徹せりければ

如何ある所由小依て斯る大神子ハ生坐りけむと所
思一けむハ信小然る有けむ然れば皇太神の靈異ハ
神一く坐る御有狀耳ハ非ず其生坐一事をし怪一
奇一び坐る義を合せて訓べき者あり古語拾遺小
是太玉命久志備所生と有て生成る方小云るあり生
れたる御子の事ハ非るを此ハ生坐一御子の奇異
あり久志備ハ右の久志備瀆久志備所生ハ更あり神
名ハ熊野櫻樟日命と申櫻樟日其例あり天孫降臨章第二書日向地名ハ楳日楳日仁上天浮橋
楳日高千穂之峯を其第一書小日向高千穂楳觸之
峯と有れば久志夫流とし活く言ふるが幸魂奇魂の
奇魂を口訣小不念而成と云るハ奇の義を元小克解

當て妙りの其ハ久志ハ念ハズ成り求のず
て至るを云て世小其計小妙る事の非る故小其
條る事久志備とも久志夫流とも云て人の得
も思議り及バざる事を云言と成り者あり大殿祭
義小云る如く凡て神名ふと小擗豊稔其と其上冠
大地の運動小依て萬物の生れ多世小其計り後た
き事ハ非る故小終小称辞と成り事傳三傳四小
小己小云り擗ハ以氣爲つて天神の物を造化し給ふ
小形無き氣中より物と成りて頭上出給ふ此方
小然ハ云て後ハ物を奇異し義小も用ふ語と
者あり阿夜志伎の阿夜ハ傳五五丁小記傳を引て
云る如く驚きて歎く聲あるが其より文と云言とも

あり活きて動ふと云言ふも成れり阿夜志伎と云
へバ其物の打驚対ひて可き状あるを云り四神出現章第
六一書小神光照海神武天皇御紀小神策と神字を訓
古事記ハ天照太御神以爲怪子天照太御神逾
思奇アヤシ而シ又ハ故取此大乃思異物アヤシキモノ云ふども有て
其字共をせしも多く用ふる事あり然レバ靈を久志
備小異を阿夜志伎小允小能當れり名義抄小靈小阿
て久志備ハ非れども泥む可クず其ハ異字も然
有レバ此久志備とも訓クとも思へども阿夜志布と
小當て書れたるあり○不宜久留此國の久ハ次の早
小對へたるあり天下の主を生むと所思しを六合

の内小照徹りせり日神小坐小依て此小ハ長く留め
 奉る可くくずとあり口訣小此言光明靈異自不可坐
 於下土故送于天以為天上之主也と有が如し此二神
 其神隨の性小隨ひ給へる者あり此國とハ降誕の地
 あり即大地を云事次小天上と有小合せて曉る可し
 其生坐り一宮ハ八洲起元章第一一書小同宮共住而
 生兒と見えたる礫馭盧嶋の八尋殿あり次小以天柱
 舉於天上と有其○自當早送于天の早ハ急ぐあり古事
 を以知べし
 記小御祖命告子言云々乃速遣於本國之大屋毘古神
 之御所と見えたる速遣もはやし小同ト刀葉一二十小去來子
 等早日本邊にも有り此を以て見小皇太神の生坐る

△神世七八章第五
 一書小海上を海原と
 訓一齋明天皇御紀
 小川上此三箇諸羅
 有川ハ上ノウチ
 訓ハあり其ハ

即天小送致一奉る可く然れば第二一書の次第
 小因小火神の生坐る以前小既小送奉る事灼然
 其ハ不直久留此國と有て此小又早と云て
 有ハ深く其心を入るれたる事知れたり○授以
 天上之事ハ字小抱りて天原之事乎授依志賜布と
 訓べし第六一書小伊弉諾尊勅任三子曰天照太神者
 可以治高天原也見え第十一一書亦然り古事記小ハ
 殊小委即其神頭珠ラ、而賜天照太神而詔之く汝命者所知高天原兵事依而賜也と有ハ
 古語の任あり可し但賜也ハ記傳小御頭玉を賜あり
 小ハ非るあり混と有が如し高天原を賜ふと云義天上之事とハ即高天原の事なり皇
 太神ハ日神小坐せば高天原の事ハ御心の任小物為

させ給ふ事あり天上之事とハ此を云ふり万葉三十二

七小天照日女之命一云指上天女之命天乎波所知食登と有る

是なり天上之事ハ天朝の政事ありと云ふハ曲

我王者高日所知奴と有ハ人の没りて靈の天小上る

此事を記傳七七小天照太御神ハ

此御事依の任小天地の共無窮小高天原を所知者

天地の表裏を隈無く御照ト坐して天下小在ゆる萬

國此御靈を蒙るすと云事無れば天地の限の大君主

小坐して世小無上く至尊ハ此太御神小るむ坐

ける偕四海萬國此太御神の御光を蒙り御靈を蒙り

かぐし其初の趣をも知ず此皇國小生坐る事をも知

ずて皇國の勝れて尊き事をも惣て知ずて有ハ外國

小ハ凡て神代の正傳説の無ハ故あり以上と有ハ如

王禊三小漢土の説ハ日官縦廣二千三十里金物水

精暈於内流光照於外其中有城郭人民と云ハ其神

を日君と云と有れども猶思東無ハ傳あり又儒家小

上帝と云ハ昊天上帝と云ハ日神ハ當べハりハ如く

みれども其も唯天の主宰を云ハりハ正しく日神と

も定の難ハ正傳説の無ハ故ありハ印度ハ長阿含

世記經ハ日官縦廣五十由旬宮殿四方遠見故圓二分

天金一分ハ頗瑳内外清徹光明遠照正殿純金高十六由

旬日天子身放光明照金殿ハ金殿光出照于日官日官光

出照四天下と有ハ然れども日神の皇國小生坐る事

を知ハりハ彼蛭兒淡洲ハ皇國ハりハ前ハ成れりハ

りハ後ハ開ハけりハ國ハありハ故ハ其ハよハ是時天地相去

未遠の是時ハ其事依_レ奉給_ル時分_リ第十一_ニ一書ハ
既而天照太神在於天上と有_ル頃ハ至てハ物定りて
大小世を経_ル状_ル事既而も有_ル所_レ知たり天
地相_レ去ハ記傳ハ引_レれたるハ天地之阿比陀と訓_レれた
るハ從ふ可_レ未遠とハ其天地との間を云_ルり古史
引_レれたるハ字の如く訓_レれた天ハ天日あり地ハ顯徴
れども餘_リハ聞_クりげあり國を天上と云_ヒ國を天下と云_フる_ル其天地
の定_ル所以ハハ先神世七代章第三_ニ一書ハ天地混
成之時_ニ有_ル相混_ニ沌_ニ未天地の分_レれざり_テ太古_ハ
り次_ニ其第一_ニ第四第六_ノ一書共_ニ小天地初判_ト有_ル

又其第六_ニ一書ハ有物若_ク葦牙云_ニ號_ニ天常立尊_ト又有物
若_ク浮膏云_ニ號_ニ國常立尊_ト云_ル如_ク天地_ト相判_レれた
事あり是_ニ二あり然れども天ハ上_リ地ハ下_リて今_テの
如_ク相定_ル事ハ幾百千萬の年を經_テたりけむ知_ベ
く_ニぬを皇太神の生坐_レ程ハ漸_ク大八洲國及山川
草木の成出_レ頃ハ未世の始_リありければ其間
合_テ遙_ク隔_テたり_バ此_ハ天地相_レ去未遠_ト有
み_テ是_ニ三あり然_ルを瑞珠盟約章ハ伊弉諾尊功既_ニ至
矣徳亦大矣於是登_テ天報命仍留_レ宅於日之少宮矣と有
小至_テる_ル全_ク天日_ノ状あり相定_レりけ_レ釋_ニ紀_ニ天
地相_レ去

未遠の述義小三五曆記曰古昔天地未分渾沌如鷄子
万八千歲天地開闢日甲子歲甲寅清輕者上為天濁重
者下為地盤古在其中神於天聖於地萬八千歲天極高
地極深數起於一立於三成於五盛於七處於九故天去
地九萬里と有て先師說云神代天地相去不遠尤叶此
儀歟と有り口訣小天地相去未遠者天地定天神生
二神而二神生日神之謂也と云るハ如何天神二神を
生一ニ神日神を生坐る事を天地の遠近ハ係て云へ
くも非 ○天柱ハ八尋殿の心御柱あり八洲起元章小
めをや
以礮馭盧嶋為國中之柱と有ハ甚く約めたる傳あり
其を第一ニ書小ハ二神降居彼嶋化作八尋之殿又化
豎天柱と有て猶委しきを私記ハ其天柱の事を書し
た多小古說云天神所賜瓊杵探得礮馭盧嶋畢即以其
杵衝立此嶋為國柱也即其杵化為小山也と有て舊事

△此神名の級長傳
十位の註せたる如く大
神皇御孫天皇御宇に於
て由りてハ古事記に
克右へリ正しく

紀小同傳有て以天瓊杵指立於礮馭盧嶋之上以為
國中之天柱也と有る是あり 但小山と化れるハ二神
の御世の限ハ八尋殿小
て住成給へるが其天柱あり天瓊杵 一書小伊弉諾尊曰我所生之國有朝露而薰滿之哉乃
吹撥之氣化為神號曰級長戸邊命亦曰級長津彦命是
風神也と有ハ其天柱の許より吹撥し其其所小風
神ハ成坐るるり其ハ風神祭詞小我御名者天乃御柱
乃命國乃御柱乃命止御名者悟奉 と有を以知べし
偕日神を天上小送奉し其ハ其風神を以多事下
小辨るが如 若此く天御柱國御柱を以負坐るハ其
天柱國柱小就て成坐る謂ふ事云も

更あろが其風神と坐る御功用ハ信小天地の御柱と
も稱申す可き程の事あり其第六一書小就て云べ
き者若て日神を天柱以て送奉らせ給ひけるハ二神
の天浮橋以て天降り給へる其如く爲て天上ハ八
はせ給へるあり天浮橋と云ひ天般船と云時ハ一
種の質を成す故小丹後風土記の久志備濱の故事の
如く土質と成れども其地より云時ハ高天原あり
其物より云時ハ天霧あり浮雲あり何れも風氣の所
在あり又風氣の往來ふ所あり又風氣の凝て成れる
物あり故其の元の本より末の終小至る迄風神の所
置小非る事無し然るを中古より此天浮橋の事小聞
クリ故小釋紀述義小私記日問以

以天柱擧於天上云是日神上天之時以天柱爲登橋
歟將又天神先所賜之天瓊矛今返上歟云答天照太
神光華無雙故以天之御柱爲其登橋即送之於天也天
柱甚短而爲其登橋者是時天地相去未遠之故也此即
天地倚杵之義也と有る以天之御柱爲其登橋と有る
宜しけれども天地相去未遠とて其より直小天小至
ク云ハ拙い説あり又問或説凡云天柱者是天神光
所賜瓊矛也方今洲國已生万功皆畢故以其瓊矛返上
於天也云々答説者云彼矛即於檝馭盧鳴爲小山也何
以小山上於天乎此説非也然則天柱者瓊矛也此矛爲
山傳自彼山登天歟是猶以天柱爲其橋之義也豈非爲
天照太神之橋哉と有る云レたり但傳自彼山登天と
云ハ彼少彦名命の粟莖小彈れり渡り坐し者日神の
如き小ハ非ず甚き所謂有る事共少く有る 偕日神の
光華明彩しく坐して天地の間小照徹らせ其大御
光輝の四方八面小行至る事ハ一も風氣の然り
むる事云も更あろが八尋殿の天御柱の許小生坐る

小先立て風神の生坐て其天柱より送奉れ故實と
今世を御照し坐す事實と少も異ぬらうハ奇異
一けれ其御靈實を齋奉る五十鈴宮小属て風神社と
云有て正應年中より風宮と申す是あり又風神祭詞
小吾宮者朝日乃日向處夕日乃日隱處乃龍田能立野
乃小野乃吾宮波定奉氏吾前乎称辞竟奉者と有り如
く其御靈の鎮坐す宮をも朝日夕日共小隈無く指入
る地處を乞給へるハ日神とハ右の所由小依て殊小
親し奉れ給ふ故あり然れば天柱舉於天上
也ハ風神を任し高天原ハ送奉給へる（事疑無）

有ける天孫降臨章小天推考の反矢あり亡し所小
天國玉より乃遣疾風舉戸致天と有を舊事紀
小ハ速飄神と有り此ハ風神小属る枝神とハ聞ゆれ
ども其御功用を受継く有けし天小苑小舉たるを
見べし况て其主神と坐す者を如何なる奇異しと業
の非くむ漢籍河圖帝通記ハ風者天地之使也と云る
も然り○與於天上也の舉を古く送舉奉流と訓る小
従ふ可し其ハ自當早送于天と宣ひて今舉奉る所小
ればあり日神の其所知者天日の御國ハ昇坐す事
あるが御父母神の取擬ひ給ふ事ある故小阿宜と訓
て彼大被詞かど小皇御孫之命波豐葦原乃水穗之國
乎安國止乎久知所食止云々天降依志奉支と有る例
の如し其ハ舉も降すも共小舉給ひ降し給ふ御方よ
り云語あり万葉二小天原石門乎開神工工座

奴と有ハ自舉リ給ふ方ナリ云々神登座ル之可波と有ハ同上事ナリ其自他を辨ヘ知ベシナリ
○日神の高天原を所知者ナリ大宮を天宮とも日宮とも申セリ又天津朝廷日朝廷とも申セリ一狀ナリ其天宮ハ大掖詞ハ天津宮事と有ハ天宮の事務マツテ云義事々令セ給ヘ多事已小祝詞講義ハ註ルリ如ク大神宮雜事記ハ垂仁天皇廿五年五十鈴宮御鎮座の時ハ託宣を記セ宮マシテ小皇太神宮勅你我天皇御宇之時天下四方國カキテ撰録可天下宮所放光明見定置云々と有ハ是ナリ又清和天皇貞觀十五年條ハ謹檢故實天照坐皇太神宮天降坐之時天兒屋根命天見通命天村雲命等彼爲輔佐之

神僕同時天降也云々始從天宮傳來無止齋庭供奉職之氏也と見え又東三條後朱雀院天皇條ハ齋宮内侍託宣你我是皇太神第一別宮撰神荒祭宮也而依皇太神託宣今更所託宣也天下四方乃人民皆皇太神宮乃御寶也其中大中臣并荒木田氏皇太神宮天宮余天降坐時利繼氏繼門天代世奉仕來補佐乃神民也とも所見ナリ倭姫命世記ハ尔時皇太神倭姫命乃御夢尔喻志國宮處波是處也云々と宣ヘ事有又万葉一十三を以て天宮を朝廷とも申セるを知ベシ又万葉一十三六小安見知之吾王高光日之皇子久堅乃天宮尔神隨神等座者云々と有ハ薨給ヘる弓削皇子の御靈の天

宮小上坐て神と坐とニラる少て此ハ決て古も傳少て
同卷三十一小皇子尊の御事を久堅之天所知流君故尔
六丁云くとい我王者高曾所知奴とも有るど皆唯詠物が
る耳少くす實事少も百練抄壽永二年六月廿三日條小近曾祭主
親俊奏法皇云夢想云參神宮平伏庭上父親定并親章
卿兩人過在堂上以親定傳仰云於我者令向天宮給畢
禪定法皇御事所令申附荒祭宮給也云くと有る以過
去一人の靈の天宮小參向ひく皇大神小仕奉る事を
知べきあり又右小引る荒祭宮の託宣小天下四方乃
人民皆皇太神宮乃御寶也と宣給へるをも思合せし

其然る可き事を曉る可し此事瑞珠盟約章あり伊
并諾尊の登天報命の下小詳小云むとす又万葉二日
殞宮之時歌小天地之初時之云く葦原乃水穗之國乎
天地之依相之極所知行神之命等天雲之八重搔別而
神下座奉之高照日之皇子波と瓊杵尊の御天降の
時と今皇子尊の降誕一事を云て次小其薨坐一事を
天皇之敷坐國等天原石門乎開神上座奴と云るも
其御靈の天小參向ハせる古傳小依りあり續紀小
聖武天皇の大御母尊の御謚を千尋葛藤高知天宮姫
尊と稱奉る給へるも其御靈の神上り給ふ天宮を
以負せ奉り又倭姬命世記小皇太神の我高天原仁坐
戸押張云くと宣へる飛戸ハ朝廷の御事あり又万葉
二三丁小明日香乃真神之原仁久堅能天津御門乎懼
母定賜而と有ハ皇太宮の御事ありとの天津朝廷小准る

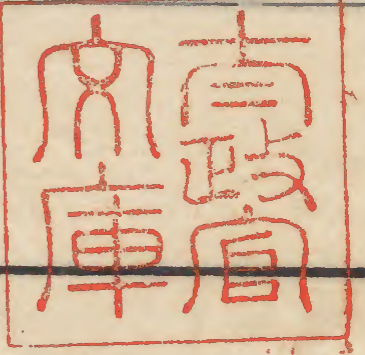
へ奉りて然申せり少く又皇天宮を日朝廷にも申奉
 小同下くして其本ハ皇天神の天宮の称を用ひさせ
 給へる者あり其ハ次ハ云べし近却崇神詞ハ皇御孫
 も有が如く皇天宮の御風儀ハ之尊乃天御舍之内ハ坐須皇神等ハ
 萬ハ上天の御儀を擬す故あり○日宮と申す称ハ古
 事記朝倉歌小多加比加流比能美夜比登と詠せりせ
 給へるハ皇天宮の御事ハ其ハ天宮小准
 然申せり古の格少く實ハ皇天神の高天原を所
 知者大宮を日宮と申せり乃仁明天皇御紀の長
 歌小古刺志天照國乃日宮乃聖乃御子曾瓢獨乃天梯
 立踐歩天降坐由志と詠りて天宮の御事ハ知べ

一又古事記同小麻紀依久比能美加度と有ハ皇天宮
 を天宮小准して稱奉りて事右の如し是を以て天
 宮を日宮とも日朝廷とも申奉り稱有る事知られた
 又外國少く日宮とも天宮日宮とも云稱の有る由己小
 上小云るが如し己小三代實錄詔ハ天皇の天下
 所知者御事を朕我食國乎平久安久天照之治聞食
 須故波云と有り此を以て天皇の御上ハ萬小日神
 小准して奉り又平田翁説ハ右の聖乃御子ハ日知の
 事を知べし御子と申奉る事少く日知ハ日を所知者御事を申
 せり少く日神を申し御子ハ皇御孫尊を申奉りて少
 少く云れたるハ信不然と説あり乃葉一十六小檀原
 乃日知之御世後と有ハ神武天皇を日知と稱奉りて

少て此將天皇を日神小准と奉り稱する二三十一
小我王者高日所知奴と有る其神去坐る御靈の天小
昇り坐す事を申せるが日知と云語を以續けたるが
り其小並ひて久堅之天所知流君故ると有るを對合せ
て曉る可し然れハ外國の賢者と者共を皇國の人よ
事ありけり字ハ聖と書る小日を知之義ハ無れども
皇國ありハ日知と訓む故小彼輩小稱へむハ皇太神
小ハ天皇小申す可き事を陰る少甚可畏事事
り努む忘る可し唯古事記高津宮段ハ故稱其御
世謂聖帝也と有る日知の意ハ有るべし漢土ハ
堯舜ありと云る者を聖帝と云倣ハたを用たる
少て玉仁ありとの所為ハ有る○天照太神の外ハ天照
ハハハ味氣無き事あり○天照太神の外ハ天照
其神と申す例此彼多存り天照高弥牟須比命天照御

天照眞良建雄神

魂神天照御門神天照高日女神等是の此等ハ皇
太神の如く天上より下土ハ照臨を坐小依て天照某
神と申すハ非ず皇太神小殊小親しく坐す所由
有るを以然稱申せる少て神名式ハ出雲國出雲郡大穴
持伊那西波伎神社大穴持海代日古神社大穴持海代
日女神社等有る如く各其神の名の上小冠ありて
た多者あり然るを外宮の書ハ等由氣大神の御事を
天照坐豐受皇大神等と記せるハ笑ふ小
堪ざら安説あり唯天照と云ハ即其神の天を照し坐す意
とし云の天照坐と云てハ即其神の天を照し坐す意
ありあり思ふ小此大神ハ殊小親しく御在り坐れハ
天照等由氣大神小御在り對へて水徳の安説を作り
皇太神の日神小御在り對へて水徳の安説を作り
神少て月神ふと云む料小せり穴可畏其天照高



弥牟須比命ハ山城風土記久世郡水渡社名天照高弥
 牟須比命和多都美豐玉比賣命と有ハ此大神ハも
 皇天神と相並ハして萬小高天原の大御政を聞ク着
 セバ然レ称奉ル可ク事申シ更ニ多ク神名式ハ山城国久
 と有レバ天照ノ下小太神ノ二字を脱セカクあリむク
ヒも思ヒ一クも熟思ム天照其和多都其並
ヘ称申セリク少シテハ一ク神ハ舉ガルク多ク姓ハ録シ山城
 國神別天孫小三富部火明命之後也と有レバ此神を
 合セテハ三ク天照麻良建雄神ハ三代實録ハ貞觀三年十
 座成ベ一ク天照麻良建雄神ハ三代實録ハ貞觀三年十
 月廿日庚申授備後國正六位上天照具良建雄神授從
 五位下と有リ上田百樹ガ奇異大本圖考ハ神名式ハ
 深津郡須佐能袁能神社有ル是ハあり其ハ真良ハ真情ハ

七月廿八日校了
 五十三葉 平岡好因

